

考古学協会で 高校生が調査発表

あす東京で 深志2年・園部実路さん



山辺地区周辺の3D地形図、土器の片で
発表の練習をする園部さん

山辺では堰の言い方に特徴がみられる。多く呼ばれる言葉ほど変化しやすく、山辺に堰が根ざしている様子をよく表す。



園部さんがまとめた研究発表用の
ポスターの一部

時代後期にさかのぼることができるといった説明をする。
高校生ポスターセッションに応募して審査を通過し、全国11組・26人の高校生の発表者に選ばれた。テーマは「薄川の流路変遷と集落立地の関係性―古墳時代における堰利用と災害への対応から―」。

化財の本が研究のきっかけになった。家の近くにある大堰が奈良時代後期に造られたといわれていると知り、興味を持った。高校生になって部活動「地歴会」で知識を深めながら調査してきた。

園部さんは「調査の成果を多くの人に知ってもらいたい」とし、「発表で専門家から研究の新たな情報が得られたい」と話していた。

(伊沢 陽)

山辺の用水路開削 研究

松本深志高校(松本市)2年生の園部実路さん(16)が、24日に東京都で開かれる日本考古学協会の研究発表会で、1年生の時から取り組んでいる調査の成果を発表する。奈良時代後期に造られたといわれている山辺地区の用水路(大堰)は、開削が古墳

削に百済系の渡来人が関わり、古墳時代後期に薄川の扇状地である山辺地区の中央部分に集落が進出したこと、過去の洪水や古文書などから考察して、薄川は北から南へと流れが変化したことを詳しく話す。

中学生で読んだ里山辺の文